

浄土

1985-12

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十八日
昭和六十年十一月二十五日印刷
（第三種郵便物認可）
（月刊）四月一日発行
運轉者：（別表）第三号
昭和六十年十二月一日発行
第五十一卷
十二月号



昭和61年度版

浄 土 宝 暦

—三上人遠忌慶讃記念号—

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和61年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからしいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

..... お申込み

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187

十二月号



此の事を見奉る者は即ち十方一切
の諸仏を見奉る。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法 話

- 成道会に寄せて……………宮 沢 善 弘……(2)
- 除夜の鐘に憶う……………川 村 悠 穂……(8)
- 《昭和60年回顧》
- この一年を振り返って……………高 橋 良 和……(13)

<連載> 一紙小消息 ⑤

- 煩惱具足の凡夫の往生……………村 瀬 秀 雄……(18)

み仏とともに = 9 =

- 学行生活——……………安 居 香 山 ……(24)

<ナムナム童話> (5)

- ナムナムさんのはっぱ……………ぬのむらてつや……(29)

◇◇長篇連載小説◇◇

- 立ち止まるな善導 第18回……………寺 内 大 吉……(35)
- 英才の秘密……………挿絵 松 濤 達 文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

成道会に寄せて



(一)

最近私は二人目の孫を得た。男の子であるがとても愛らしい。上の女の子は四歳になっ

宮^{みや}沢^{ざわ}善^{ぜん}弘^{こう}

(大本山光明寺執事
横須賀市正観寺住職)

て、反抗期に入っただのか、口答えなどは大人顔負けなくらいである。お茶目で仕方がないと思うのであるが、二人が並んで眠る寝顔を見ていると、やがて何か悲しい気持ちになってくる。この子等が成人する頃に、世の中はど

う変っているだろうか。私にはとても想像することが出来ない。

人間は、科学技術を発達させた。限りない恩恵を享受することが出来る。が、反面で限りない危険をも受け取らなくてはならない。

人間中心主義の突き進む所は最悪の破壊なのか、それともホモサピエンスたる人類、これに歯止めをかけることが出来るのか、誠に他人ごとではないのである。

今日、例えば、人間活動と自然との関係を調整して、人間の生活環境の保全と最適化を図ろうとする(システム・エコロジー)運動。かつてチャップリンが映画『モダンタイムス』でいみじくも警告した機械と人間との関係は、コンピュータの発達により比較にならない程にその深酷さを増し脅威となってきた。このことに対して人間頭脳の優位性を科学的に立証し、明らかにしようとする(サイバネティクス)運動。更に、文化的多様性の視点から改めて人間の特長に着目し、諸民族の多様な

文化を尊重することで(非中心化理論をもって)文化環境の再編成を達成し、科学技術の善用と活性化を図ろうとする(エトス)運動。或いは、社会制度を改善して、解放された市民社会を地球規模で確立しようとする平等友愛の運動等々。その努力には敬服しても、それらが総合性と絶対性を欠くという理由で、充分な歯止めにならうとの期待は必ずしも高いものではない。

こうした現況の中において、今日、少なくとも肩身の狭い思いをしているものとして『哲学』が挙げられよう。

これは、政治哲学、社会哲学、歴史哲学、教育哲学等という所の哲学ではない。頭に何も付けない哲学である。哲学的に言うならば正しく『哲学それ自身』のことである。

哲学本来の意義を思うと、人間の究極的存在は何か、人間の価値は何かなどを、自己自身の理性に基づいて思考する―これを哲学、す、と言うが、そういうことであり、実践的に

その目的を問うならば、真の人間価値をいかにして実現するかということになる。これが破壊や破滅への道でないことは明白である。

しかるに哲学の現実を見る限り、理論的には何の統一ももたず、一方の肯定は他方の否定を意味し、ないしは、単なる知識の探求、集積、分析に終始している、とさえ言われている。また、歴史的には、哲学の領域の中にあったものが、今は諸種の学術、科学、技術として独立し、それ等は個々に実証の学分野をうち立てて、哲学を頼りにしない傾向をどんどんと強めてしまった。

人間価値の実現とか、人間の解放とかの使命は、哲学はこのままでは主導権の保持発動が出来ないばかりでなく、なしろその手足をもぎ取られて独りで立つことさえも出来ないのではないかと憂慮されている。

今、哲学について言われていることは、哲学回生の道は、西洋中心から脱し東洋思想と

の無限の関わりを求めることの外にない、とこれは哲学者自身の切実な声なのである。

私自身一応は哲学を志した端しこれの者であるが、果たして、その回生の道は容易に達成出来るものなのかどうか、それに樂觀は出来ないと思っている。

また、これから回生の努力をするとしても、予想される二十一世紀の社会や思想の混乱に向かつて、それを収れんする程に間に合うものなのか、この危惧を解消してくれる保証はない。更にもってそのこと以上に氣に掛かることは、所註『哲学は学問である』ということである。学問としての哲学の宿命は、哲学史が示す通り、絶対の理論は望むべくもなく常に相對論に終結することに尽きている。

今日渴望される所のは、人類を導くための絶対なるものは何かということである。

(二)

今世紀初めの頃に、ポルトガル中部の小村で一つの事件が起きた。平凡社百科辞典の詳細世界地図でやっと認めることが出来るフアティマという小村で、三人の子供の前に聖母マリアが現われ、三つの予言をしたという事件である。これは一九一七年と伝えられる。

その第一は、第一次世界大戦が連合国側の勝利をもって終わるということであった。第二は、第二次大戦が起これることと、自由主義に対する社会主義（ソ連を名指しているとも伝えられる）の脅威の増大であった。

問題はその三番目である。『フアティマの第三の秘密』と言われているものである。

知る所によると、この文書はバチカンの大金庫の奥にしまわれていて、何人も見ることに許されないものであるという。

ただ一つの逸話が、その文書の容易ならざる秘密性を匂わせている。というのは、法王パウロ六世が、法王として特権でこの文書を読んだ時、ショックのために失神したと伝え

られていることである。

この文書の内容は依然不明である。公表されないということは、文書の内容について良からぬ推測を生む原因となる。好ましく、喜ばしい内容であるならば秘密にする必要はないし、失神されたといっても、嬉しさの余りであればそれも結構である。しかし、事実はどうもショックに由るということらしいので大変困った内容なのであろうと、これは専らの噂になった。

内容不明なものを取り上げ、憶測でものを言うのは慎まなければならないが、譬えとして触れるとすれば、よしんばその内容が極悪のものであり神の救いがすでに及ばぬというような、地球の破滅に関わる程のものであったとしても、仏教の場合は、なお救いの道が残されていると思うのである。

地球も人間も、この世のすべてが無くなってしまうって何が救いか、言われればそれまでもかも知れない。しかし、神が造り給うた万物

が、神の救いの及ばない程の破滅を迎えるのと、元々が生成流転、因縁生起、諸行無常と観じ、五十六億七千万年の後に受ける未来仏の救済を信ずる仏教徒であれば、その信仰の中で救われると共に、今生きる尊さを一層ありがたく噛みしめて、今生の生活に、より一層の励みを感じるはずである。

話を戻して、二十一世紀の人間救済に、絶対なるものとは、ここにおいて信仰の確立であると置き替えたい。

これは仏教の信仰に外ならない。他の宗教に属する者は、何を「我田引水」とするかも知れないが、その人達もすべて含めて、仏教を主軸とする信仰に引込まなくてはならない。宗教の名において戦争をするようなことは絶対にあつてはならない。世界の宗教を仏教の原理に基づいて修正することが必要である。慈悲の心をもってすれば案外うまくいくかも知れない。平和こそ仏教なのである。

日本においては、宗派仏教の拘りこもりを捨て、

一に仏道を歩むことこそが第一である。

これは、宗派を解消することではない。拘りを捨ててと言うのは、先ず仏法に帰依するという原点に戻るといふことである。

信仰は、釈尊の、そして自宗の祖師の宗教的絶対体験に依存している。私は法然上人の教えに従って、ナムアミダブツを申し、釈尊の説かれた法の中に生きるといふことなのであつて、理論対立の中からは、決してこの道は生まれない。拘りは仏法を相対化する。

(三)

紙数に限りのある所にあまりにも大問題を掲げ過ぎた。しかし、成道会に寄せる気持ということでは、ここまで及ばなければ意味がないように思える。

十二月八日には小寺でも成道会を修する。朝のお勤めを成道会法要に切り替えるのであるから、私一人で修するに過ぎない。だが

お勤めの後の気分は誠にさわやかである。

浄土宗の法式差定によると、成道会には仏遺教経を読誦するのが適當と定めている。

成道会に仏遺教経—言わば釈尊のご遺言—を読誦する。このことは意義深遠で誠にありがたいことである。釈尊一代の説法は、どの時点をとつても、また、誰を前にしてのお話であっても、更には場所が何処であつても、常に一に帰する。それは悟りの内証の個別的説論であるからである。その法理は絶対である。一貫し、統一されたものの変化といふことで、受ける側が多様であることに過ぎない。

「世尊、成道し已り、是の思惟を作す。離欲寂靜、是れを最も勝れたりと爲す。大禪定に住して諸の魔道を降し、鹿野苑の中に於て、四諦の法輪を転じ、憍陳如等五人を度して道果を証せしむ。復、比丘有り、所説の諸疑、仏に求めて進止す。世尊教勸して、一一に開悟せしむれば、合掌敬諾して尊勸に順う。」

と、この流れるが如き美しい序文は、仏説四十二章経の序文であるが、私の岩波文庫版第三刷発行（昭和十四年）のぼろぼろの本も成道会の日には必ず読むことにしている。

昭和十五年大正大学予科二年の時の、修身のテキストであつたこの書物は、私が仏教書に触れた初めての本である。拙い鉛筆書きの沢山の書き込みを判読しながら、ありし日の感動を蘇らせながら、沙門とは、四諦の理の逆転の因果律は、有為とは、無為とは、博聞について、因縁は、四大はと辿って行くと、すでに釈尊在世の説法にあずかり、声聞道を修するやうな気分になる。ここには大小も、座衆もない。

「仏言く、仏道を学ぶ者は、仏の言説する所を皆応さに信順すべし。譬へば蜜を食ふに、中も辺も皆甜きが如し。吾が経も亦爾り。」

除夜の鐘に憶う



「鐘は上野か、浅草か」

ふと子供の頃を憶い出す。大晦日に金山寺
味噌を檀家に配り、本堂や庫裡の掃除を済ま
し、母はお勝手で正月の準備を終えて一休み
していると、遠く近くから、鐘の音が聞えて

川^{かわ}村^{むら}悠^{ゆう}穂^ほ

(静岡市西福寺住職)

くる。本堂の廊下にある釣鐘は、納所さんが
ついた。それが済むと「さあ出かけようか」
と父親と一緒に浅草の観音さまに出かける。
田原町の今の地下鉄入口のそばに果物店が
あった。そこでバナナを必ず買ってくれた。
体の弱い私を、特に父親は可愛がってくれ、

六区に行く時はいつもその店でバナナを買ってくれた。そこで、私はバナナで育ったようなものだといわれた。六区を一廻りして、観音さまをお詣りして、帰りには露店の焼鳥を二、三本買って帰る。これはカルという犬のお土産に買うので、子供の私には、焼鳥は犬が食べるもので、人間が食べるものでないと思っていた。

寺に帰って来て一休みしてから、本堂にロースクをつける。四時、みんな本堂に集まり元旦のお勤めをする。母はお勝手に朝の祝膳の準備。暗い本堂でお祈りの後、両側の位牌壇、裏堂のお倉の中の仏さま、門前の歴代様のお墓等におまいり。それが終って一室に集まり、お膳を囲む。両親、兄弟で十人、その他、納所さんや、お手伝いさん、小梅とコブの入ったお茶で挨拶。そして、お屠蘇の盃を廻す。終ってお雑煮、数の子が沢山あった。朝の祝膳が済んだ頃には夜は明けている。それから学校、学校から帰ってから風呂あけ、

屋根にのぼって一間ばかりの竹竿の先に炭俵の上下に押えに使ってある藤蓑の輪を結びつけ、それに風呂糸を通して、糸と竹竿をもって前後に振りながら六角風の凧をあげる。子供の頃の正月の憶い出は懐かしいものである。

静岡に来てからは、釣鐘も供出して今は無く、最近では紅白歌合戦も見ることなく、外に出ることもなく、早く寝込んでしまう。

除夜の鐘というと夜空の星を憶い出す。静岡に来て戦災後一人でいた時、一晩中墓地で座禅していたことがある。その時は若くもあり、夢中であつたので寒さなど感じなかったようだ。夜空の星がきれいであつた。昭和四十一年インド・ブダガヤの宝篋印塔落慶式に参加した時、大塔でも座禅した。あの大きな暁の明星が未だに目の底に焼きついている。今は亡き人、巖谷勝雄上人は何回もインドに行かれたが、その上人が一番感激したのは、一番はじめにインドに行つた時だといわれ

た。私もそうありなと思ひ、私ははじめての感激を忘れない為にと、その後インドには行つてない。然し日本寺も建つたし、その周囲も大分變つたようであり、機会あらばもう一度訪ねて見たいとも思う。

何回これで年を送り、新しい年を迎えるのであろうか。来年は寅年だという。私も大正三年の寅年生れ、六度目の寅年を迎える。虎は千里行つて千里帰るといわれる。私はどこから来てどこへ帰るか。私は、私の名前、川村悠穂を「かわむらゆうほ」といつていたが「かわむらゆうほ」と読む人が多い。「ゆうほ」を少しのぼすとニューホーになる。私は宇宙のどこから来てどこへ帰つてゆく未確認飛行物体UFO、そうだ、私は極楽から、この世にやつて来て極楽へ帰つてゆくUFOだと思ふようになった。

法然上人は建暦二年正月二日から御衰弱が増して来た。三日に或るお弟子が「この度の

御往生は決定でございますか」とお尋ねすると、「われもと極楽にありし身なれば、さだめてかへりゆくべし」と答えられた。

来年は寅年、極楽へ帰れるかどうか、阿弥陀さまが帰つてこいと、ボタンを押して下されば帰れるのだが、阿弥陀さままかせでこれはしようがない。一生懸命、善導大師の發願文を唱えている。何の為にこの世にやつて来たか、私の寺の復興の為にやつて来た。これが私の役目であつた。お蔭で寺は復興し、息子は一生懸命手伝つてくれる、孫も内孫三人、外孫二人あつて、私の生まれて来た役目は一応終つたものと思つてゐる。

一休宗純和尚は、二十五歳の時、盲の琵琶法師の平家物語をきいて感激してしまい、本堂の真中に飛び出して、

有漏地より無漏地へ帰る一休み

雨ふらばふれ風ふかばふけ

といつたので、華叟禪師は、一休みの一休を大書して与えたという。それから宗純さんは

一休という道号で呼ばれるようになったという。私も今は一休み中という処か、一休みといっても、休んでばかりもいられない、与えられた仕事はやらなければならない。これを正受というのだそう。去年は、はじめての五重相伝会を行うのを間近かに控えていたので、原稿書きもお断りしてしまっただが、今年は五重作礼と例年のお十夜くらいなものなので、こんな原稿を書かして頂いている。

昔は陰暦であつたので、大晦日は真暗闇であつた筈である。明治五年十一月九日に太陽暦となつたので、大晦日でもお月様が出ている年もあるということになつたと思う。

百八の煩悩で真暗な私達の心を除夜の鐘で撞き落せば、月が変り年が更まり、闇夜も一夜一夜かすかに現われ出た月で、その明るさを増してくるように、私達も明るい年を迎えられることを期待してのことであろうが、あの月の世界には人間が今は、何回も行ってい

る時代である。

アポロ十五号で月の世界に行ったジム・アーウィン、月に降り立った時、目の前に石があり、その石の上に小さな石がのつていて、あたかも自分を迎えているように見えたので、その石を持って帰って来たという。宇宙を飛んでいる時に、廻りには沢山の星がまばたいていたが、地球は青白く光り輝ききれいであつた。それが人間が住むことの出来る、そして、自分の帰るただ一つの星であり、地球であつた。しかしその中には四十八億人もの人間がうごめき、相争っており、バチバチ光るその火が、何であろうかと思つたら、ベトナム戦争の砲火であつたという。国境線は見えないが、国境をめぐって人間は相争っており、今にも核が爆発すれば、あのきれいな地球には、人間も住めなくなり、その他の生物も死滅してしまうという。人間とは何であろうか、そして今、この宇宙に地球の代表者となつて飛んでいる自分とは何であ

ろうかと思つた時、やるせない氣となり、地球に帰つてからは、宇宙飛行士をやめてしまい、キリスト教の牧師さんとなつて、ノアの箱舟を探しているという。他にも三十数人の宇宙飛行士が出たが、今、残っている宇宙飛行士は一人だけで、宇宙に於ける感想を聞いても、黙して語らないという人が大部分だったということは何を物語っているのだろうか。今度、日本人が宇宙飛行士となるというが、帰つて来た時の感想をきいてみたいものである。

今や国際間の交流で若者同志の交流も多くなつたが、白い人、黒い人、目の青い人、目の黒い人、日本人は自分達以外のことを外人という。同じ人間だと思ふが言葉も異り、膚の色もちがうのでそういうのだろうか、人間とは何だろうか、自分とは何かと、その解決を仏教に求め、日本にやってくる、そういう外人が増えているという。

科学の華は益々華開いているが、命の問題、心の問題は益々混迷、不安、動揺ということ、そこに、しあわせを得たいという、いろいろの願ひがある為に、新しい、おかしな宗教が幅をきかせてくる。伝教大師現世利益和讃には「七難消滅の誦文には、南無阿彌陀仏をとらふべし」とあると、弘法大師は、南無阿彌陀仏を利剣名号を書かれるし、一休さんは「一枚起請最も奇なる哉」として、晩年には「衣を更えて浄土宗に入る」と狂雲集に記されたことから、南無阿彌陀仏は仏教の極意ともいふべきであらう。

来年は、三祖記主良忠上人の七百回忌正當ということであるが、その良忠上人はすでに十四歳の時に、

「五濁の憂世に生れたるは、恨み傍々多けれど、念仏往生と聞くときは、かえつてうれしくなりけり」

と申されたということである。

まずは、お念仏で明るい年を迎えよう。

この一年を振り返って

高^{たか}橋^{はし}良^{りょう}和^わ

和解は出来たが観光税のその後

三年ほど前から、抗争していた京都の古都保存税という、観光の社寺に徴税を命じる京都の観光税の問題は、今夏拝観停止するという強硬手段によって、京都の社寺は、大混乱となり、さらにそれらの社寺の門前町とかかわる土産ものの店、そして旅館からも、拝観停止に反対するとともに、京都商工会議所では街頭署名も乗り出すなど、いよいよ紛糾し、その間に常識経験者や財界人による仲介のあっせんまで出たが、仏教会は、これも拒絶するという態度に出たためにいよいよ混乱を重ねていた。

こうして解決しないままに、京都市では今川市長の任期がきたので、その選挙がなされることになった。

一方の市当局でも、この選挙に加えて観光税で紛糾しているということになると、いかに四党相乗りの選挙でも、その社寺の背景が大きいだけに、場合によっては、その選挙にも関係がもたれるところから、先の学識経験者による仲裁についてなんとか仏教会と話し合いをすることになって、手を握る方針に変ってきた。

それに応じて仏教会も、これ以上の混乱はなんとか避けたいというので、その選挙前の八月六日遂に、仲裁者に委せることを決めた。

これによって一応観光税問題は、表面的に仲裁者の案の出るのを待つことになった。しかし八月いっぱいはその案が出される予定が、未だ案が出されていない。(この執筆のあと案が出るかもしれないが……)

市当局としては、すでに市議会において税の実施を可決しているので、六十年度がすでにあとわずかであるが、税収入の予算が、繰り込まれているだけに、目下その焦燥感に追われているし、仏教会としては、仲裁案の如何では、あるいは再闘争になるかもしれないような様子がある。

こうしたなかに、京都の寺院のなかには、仏教会の和解について不審をもって仏教会から退会する寺も出てくる始末であり、仏教会としては、会の法人化も促進しているので、その申請をしたり、また取り下げたりしていることで、信頼性も薄らぐ始末で、これらの問題の解決しないままに、どうやら越年する可能性もあり、表面的には和解したかに思われているが、その根は深いようである。

東本願寺の問題また紛糾

とに角十年來の問題で、門首と内局とが対立し、あるいは訴訟となり、また双方が妥協してほっとしたかと思うと、今度はまた門首が当局を相手取って、訴訟をやった。

まさに泥試合となつて、困るのは末端寺院である。

地方の別院の住職は、大谷門首であったり、その子供で大谷家一門の人が代表役員である別院もあるので、それらの門首関係の別院は、単立になったところもある。浅草本願寺と言われていた東京別院は、大谷門首の法嗣であり、新門という大谷派の後継者であるが、東京別院が、単立になったために、新門の地位は、後継者から除かれることになった。

まことに血で血を洗うような問題が、エスカレートしている。同じ本願寺であるが、西本願寺のほうは、無風で宗務所の建築が出来あがり、阿弥陀堂の屋根替工事も完成して、現門首の全国への布教も終わった。

しかし一般の人々には、西本願寺、東本願寺の区別がつかないままに地方では、本願寺の問題は、どうなっているのですが、とたずねられると困っているところもあるらしい。

この東本願寺問題は、当分解決されそうにない。京都の本山の門首と当局だけの問題ではなく、全国に波及している問題であるのでなんとかはつきりしないと、仏教界全体の迷惑になりそうである。

東本願寺は、どうなるのか、といったことが、仏教に関心をもつ人なら、話題にしそうなことだけに、早く双方が手を握るようになってほしい。

マスコミの公害に対処

仏教界という全国寺院の体質は、それぞれの宗派においては、強い紐帯となっていて、仏教の全体の組織体は、そんなに強いものではない。

カトリックやプロテスタントは、その教会や信者が少なくても、割合いも社会的になにか強いものをもっている。しかし仏教寺院は、まことに弱い。

その証拠は、マスコミがその点をねらって、いろいろな仏教寺院の話題をとりあげたりしながらかってい

ることが多い。

坊さんを登場させたり、それに話題をとって揶揄している。

先日のフジTVのタモリの「笑っていいとも」の時間に、「開祖淫乱しようにん」といったり、騒動宗といったり、他力本願派など突拍子もないときに使っていたことがあった。あきらかに宗祖を侮辱したことばであり、ちょっと聞いただけでも、親鸞聖人に通じることばと受けとれる。

その上他力本願といったことばも、真宗の教えをして何か人だのみ、他人に迷惑をかけても知らぬ顔の半兵衛を思わしめることばである。

そこで真宗本願寺派では、門信徒からも抗議がありこの問題をとりあげて直ちにフジTV局に抗議した。それでTV局では、この問題をあとのTVでは伏字にして直ちに謝罪するという処置をとったために、大きくならずに終わった。

問題は、西本願寺だけのように考えてもらっては困ることで、もっと仏教全体の寺院が、当面する問題として真剣に考えることである。

芝居に登場する僧侶にも、ロクな僧がいない。僧侶といえば、ナマ臭くて、世間が問題しないような諸行をするようなのを登場させているのは、我々仏教徒にとっては、淋しいし悲しいことである。

宗教否仏教のこうした扱い方に対しては、単に笑ってマスコミを聞いたり読んだりしていないで、立ちあがるときは、より強く仏教全体の問題として抗議すべきではないだろうか。

TVの放映についても、残念ながら、侮辱されている面もあり、またクイズ番組においても同様である。

西本願寺の今回のフジTV会社への抗議については、仏教寺院の今日のマスコミ公害に対する一つの姿勢を示したものである。真剣に考えるべきではないだろうか。

靖国神社への首相の参拝

隣りの中国でもこのことについて問題にしていた。

中曽根首相の公式参拝が、一神道の神社に一国の首相が参拝したことについての反響である。

もちろん我が国の国会においても、やはり問題になっていた。この靖国神社問題は、我が国の仏教、あるいはキリスト・神道の間においても反対していることである。

首相は、国のための犠牲になった人々にお礼を言うために参拝したということであるが、公的な立場での参拝ということの問題になる。

これは私人であつても一国の総理である人が特定の神社に参拝すること、閣僚も同様参拝することが、憲法違反であるということである。また右傾化につながるということにもなるという。

三百万人の戦死者を出した今次大戦。亡くなられたの人々にとっては、まことに気の毒なことである。自らの意志で戦死した人ではない。この国の犠牲者である。

一方においてそれらの人々を弔らうのにどこが悪いという意見は、戦死者を出した家庭の人々にとっては、不足であると思う。むづかしい問題である。例を仏教の寺院にとってみると、それらの戦死者は、いづれもその寺の檀家である。

地方の寺院にとっては、まことにむづかしい問題である。憲法を質にとるか、道義をとるか、そういった点が、地方寺院のこの問題についての意見は、区々まちまちというようであるが、果たして明年度の内閣の公式参拝の問題は、首相が本年公式参拝という点で行った点で、さらに問題視される可能性はある。

一紙小消息

⑤

煩惱具足の凡夫の往生



村瀬秀雄
むら せ ひで お

「我身わろしとても疑べからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫也との給へり」

いつも心の中に煩惱を起してばかりいるわが身であるが、だからといって往生できないかも知れぬと思つて疑つてはならないのである。善導大師は深く信ずる心を解釈して、初めにわが身の程を深く信じ、その上で阿弥陀仏の本願を信ずる真実の信心のことであると

した。そしてわが身の程をどのように信ずるのかについて、次のように説いた。

「わが身は煩惱具足の凡夫であり、善根があったにしても極めて僅かに過ぎないために、迷いの世界にあって生死を重ねながら、いまだに煩惱と苦悩の炎に包まれている火宅から抜け出せないでいる。こうした己れの実体を素直に認めて深く信ずるのである」(往生礼讃 偈)

つまり阿弥陀仏の本願を深く信じて、仏の慈悲に身を任せるためには、まず自らを反省して煩惱具足の凡夫にすぎないことを自覚しなくてはならぬということである。われ等が煩惱のために道理にあわないことを行つたにしても、往生を疑ってはならないのである。

道綽禪師は聖道門は難行道であるために今時の修行に適さないとして捨て、誰にでも修められる易行道である浄土門に帰依するようにと勧めた。それというのも人々が己れの能力の限界を知らないで悟りを求める修行をして、一人としてその修行を成就できる者がいないからであるそればかりでなく、悪心と悪行とは至る所にあるとして、次のように説いた。

「煩惱を断じて悟りを求める修行は在俗の人たちは勿論できないが、出家して修行に励んでいる者でも成就し難いのである。誰でもが守るべき五戒を保ち、十善を行うことすらできる者は甚だ少ない。それに反して悪心を取り

し、悪行を犯している者の数は甚だ多い。しかも諸悪を行っている者たちは嵐のような勢いで激しく世間を動き廻り、豪雨のように至る所に及んで見受けられる」(安樂集)

人々は煩惱という苦悩の中にあつて、今にも溺れようとしている。仏の慈悲心は、このような者たちにこそ向けられているのであつて、そのために急いで救う教えを説いたとして、善導大師は次のようにいった。

「仏の大慈悲は、この世で苦悩している者にこそ向けられている。迷いの世界から抜け出せずに、輪廻を続けて止むことのない者に哀れみを垂れ給うのが仏のみ心である。だからこそ釈尊は苦悩を続けている凡夫のために極楽浄土に往生できる法門を説き、その修行を人々に勧め給うているのである。たとえ目の前で水に溺れかかっているような危急を要する者をこそ急いで救つてやる必要がある。岸の上に立っていて、身の危険を感じていない者に対しては、殊更に急いで救わなくても

よいのである」(観経玄義分)

明遍は三論宗の碩学であり、博学多才な学僧として知られていた。明遍は善光寺に詣った帰りに法然上人を天王寺に訪ね、次のように尋ねた。

「念仏を唱えていながら心が散乱し、妄念が起ってしまうが、どのようにして妨いだならばよいであろうか」

上人は答えていった。

「煩惱を具足している凡夫にとって、どうして迷いの心をなくすことができようか。これは源空も力の及ばないことである。心が散り乱れていても、妄念が競い立って起っていても、口に念仏を唱えていれば、阿弥陀仏の本願力に乗じて必ず極楽往生できる」

明遍は上人の言葉を聞いて納得し、そのまま帰って行った。部屋に戻ってきた上人は、そこに居合せた人たちにいった。

「心を静めたり、妄念を起さずに念仏を唱えたいと思うのは、生れつきの目鼻を取り除い

てから念仏を唱えようとするのと同じことである。何んと仰山なことをいうものである」
(明遍僧都との問答)

顔から目鼻を取り除くことができないのと同じように、妄念をなくして念仏を唱え続けていることができないということである。明遍は名利を厭う必が深く、三十七歳の時に光明山に移り住み、五十四歳の時に高野山に登って念仏を唱えていた。三十年の間一度も山から下りなかったので、高野の明遍とも呼ばれていた。これ程の名僧にして、しかも念仏を唱えている時に起る妄念を若にしていたのである。法然上人は凡夫の心の中には一時に百の煩惱が起るのであるから、自分の力で難しい修行をしたくてもできないとして、次のようにいった。

「迷いの世界に沈みきって動きがとれない人のことを常設の凡夫といっている。あだかも恒河という大河の底に沈んでいる生き物が、身体が大きいために大河一ぱいになって動き

がとれないという話があるが、これは末法の凡夫を喻えたものである。また弘法大師は凡夫という二字を酒に酔ひれた人のことであると説明している。まことに凡夫の心が狂っていることは、善惡を見定める力をなくした人のようである。一時に百の煩惱が入り混って起り、善いか悪いかを区別する判断が混亂し易いために、どのような修行であっても自分の力だけで成就することは難しい。生死の世界から離れるために修行するためには、まず悟りを求める心を起して煩惱を滅し尽し、限りなく長い間にわたって難行苦行し続けるのでなければできない。しかし穢れきった惡世に生れた凡夫にとっては、仏になりたいと願っても、自分の力だけでは修行できないのである。そのために地獄から天界までの六つの世界を次々と巡って生死を重ねてきたわけである」(或人のもとへつかわす御消息)

煩惱を具足している凡夫が仏の悟りを得たいと願うならば、念仏を唱えて極樂往生する

しか方法がないのである。そのために上人は新しく淨土宗を開いて、誰でもが直ちに極樂往生できる法門を明らかにしたのである。ある時、上人は次のようにいった。

「自分が新しく淨土宗をたてた意味は、凡夫といえども極樂淨土に往生できる法門を明かすためである。もし天台宗の教えによれば凡夫も往生できると説いているが、その仏國土は凡聖同居土といって勝れた世界ではないのである。もし法相宗の教えによれば三つの仏國土をたてて詳しく説いているが、そこには凡夫が往生することを許していない。各宗の教義はいろいろと違っているが、いずれも凡夫が勝れた仏國土に往生することを許していないのである。そこで善導大師の觀經疏に基づいて淨土宗をたてたのであるが、これによって初めて凡夫が勝れた極樂淨土に往生できる道が開かれたのである」(立宗につき釈難の御詞)

世にも學識も才能も勝れている高僧が多く

いる。また修行に励んでいる名僧もいる。学徳を兼備した知識が唱えている念仏は世にも有難いものに思われる。それに反して何も知らない愚かな人が唱えている念仏はそれ程にも感じられない。ある人が上人に尋ねているのに、学識のある徳僧が唱える念仏は特に勝れた功德があるように思うということであった。すると上人は答えていった。

「仏の本願をよくよく考えてみると、誰が唱えても念仏に差別はないのである。そのわけは阿弥陀仏が法蔵菩薩としてご修行中であつた時に、十方の世界にいる人々が念仏を唱えるならば、たとえ十声の念仏しか唱えなかつた者であっても、必ず極楽浄土に迎え入れるであらうと誓ひ給うたのである。十方の世界にいる人々というのはすべての人々ということであつて、学僧知識だけを選んで往生させたり、何も知らない者を見捨てるということではない」(念仏往生要義問答)

またある人が上人に問うていうのに、心を

澄まして一心に唱えている念仏と、妄念が頭に浮んでいる時に唱える念仏とは功德が違ふと思うということであつた。上人は答えていった。

「どちらの念仏であっても功德は同じことであつた、少しの差別もないのである」

するとその人が重ねて問うていうのに、心を澄して唱えている念仏はただひたすら極楽浄土のことを思い、阿弥陀仏の本願のことを考えているのであるから、余念を混えることのない清浄な念仏である。心が散乱している時の念仏は心と身体が別々であつて、口に念仏を唱えたり手に念珠を繰っているだけのことであるから、不浄な念仏である。どうして念仏の功德が同じであるのかということであつた。上人は答えていった。

「そのような疑いを持つのは、まだ十分に本願のいわれを知らないためである。阿弥陀仏は心が散乱してやまない人々を救うために、生死を繰り返している大海に本願という船を

浮かべ給うたのである。石のように重いものでも、麻幹のように軽いでも、一つ船に乗せれば同じように向う岸に着くようなものである。本願が特に勝れているというのは、どのような人がどのように念仏を唱えていても、同じように往生させると誓い給うたということである。念仏を唱える時に、こうしなくてはならぬという決りはないのである」(同上)

同じく念仏を唱えるならば清浄な念仏でありたいと願うのであるが、それがいかに難しいことであるかは自分自身がよく知っていることである。上人はまた次のようにいった。

「善導大師は何れの仏国土も皆勝れた世界ばかりであるが、心が散乱している凡夫では往生できないのであると説いている。人はそれぞれにわが身を振り返ってみなければならぬ。そうすれば口では経を読み、身では仏を礼拝していても、心では思わなくてもよいことばかりを考えて、一時として心が静まることがないのに気がつく。このような有様では

何らして生死の世界から抜け出せるのであろうか。こうして遠し昔から今に至るまで迷いの世界を辿ってきたのである。もし地獄におちれば燃えさかる猛火に焼かれ、そこから逃れることができないのである。それなのに悲しいことには煩惱のために善心が年とともに薄くなり、悪心は日増しにいいよ盛んになる。だからこそ古人がいった言葉である。煩惱は身に添う影であって離したいと思っても離れない。悟りの智慧の菩提は水に浮ぶ月のように、手にしたいと願ってもとることができない。だからこそ阿弥陀仏は五劫の間も考えて、凡夫までも救う本願をたて給うた。この深甚微妙な本願は善人と悪人とを区別せず、持戒者破戒者を選ぶことなく、在家出家を問わず、誰にでも平等と慈悲を施したいと思いつくのである。ただ深く本願を信じて念仏を唱えていれば、命終に仏の来迎を蒙って直ちに極楽往生できるのである」(同上)

(つづく)

みに仏ととも

=9=

—学行生活—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

昭和九年四月、ある日の未明、暗い廊下をあわただしく走る音で、私は目を覚ました。

「黒谷本山が火事だ」

この事件が、どれ程重大であるか分らぬままに、私は布団の中でうつらうつらしていた。黒谷の本堂の棟柱の焼け落ちる音が、百万遍まで聞えてきたとも、後で聞いた。それ程に大きな本堂であった黒谷の本堂と方丈は、この時、焼失してしまった。それは、黒谷は勿論、浄土宗にとっても、大きな損失であった。

しかし、この火災は、もっと大きな波紋を浄土宗に投げかけた。この年の四月十一日に、浄土門主で知恩院門跡の山下現有大僧正が百三歳で遷化された。当然この後任問題がおこり、黒谷法主の望月信亨法主が、その後任に考えられていた。そこへこの大火災である。望月法主は、この火災の責任を取って、門主候補になることを辞退された。宗内はこれのため紛糾した。

次の候補者として、私の師匠の林彦明大僧正が浮上してきた。ところが当時、知恩院執事長であった加藤鏡心

師が候補者となる動きもできて、宗内は騒然としてきた。林法主は極めて厳格な性格の持ち主であった。筋の通らぬことは、一切認めなかった。それは、浄土宗内では余りにも有名であった。

知恩院門跡の推戴に、当時どうした政治的背景があったか、その些細については知らないが、選挙となるような結果に対して、林法主は心よしとしていなかったようである。そしてまことにあっさりとして、百万遍法主の地位を捨てて、自坊である沼津の乗運寺に引きあげてしまっ



——大本山百万遍知恩寺六十九世
林彦明大僧正の墓——

た。正式な記録では、六月八日に百万遍を隠退したことになる。結局、知恩院には増上寺から岩井智海師が八十世として入山し、百万遍には桑田寛随師が入山している。火災のために責任をとられた望月信亨師は、後年、一代おいて八十二世として、知恩院に入山されている。

林法主が百万遍を引かれるということになると、私も百万遍にいるわけにいかない。林大僧正と共に、私も沼津に連れていかれることになった。切角、東山中学校に入ったのであるが、たったの一学期だけで、県立の沼津中学校（今の県立沼津東校）に転校することになった。

当時、東山中学校の校長先生は、江藤徹英師であった。いよいよ転校がきまった或る日、江藤校長は私を校長室に呼んで、いろいろと訓誡された。

「残念だが、止むをえないね。頑張ってください」

多分そのようなことを、言われたように思っている。当時、東山中学は最も衰微していた頃で、私のクラスメイトはたった二十一人であった。私が欠けると一年生は



——東山中・高等学校正門——

僅か二十人となってしまふ。校長先生としては、心細い限りであつたに違ひない。この頃の東山高校の隆盛を思ふと、今昔の感に堪えない。

私はそんなわけで、沼津の乗運寺の小僧としての生活が始まつた。林大僧正は、知恩院専修道場の上首ということで、殆んど京都に居られ、時々沼津には帰つてこられた。そして、沼津の寺は、子息である林輝彦師が住職をして居られた。そんなことで、生活指導は、多く輝彦師から受けることになった。

しかし、ここにも私を守るみ仏達がおられた。その一人は、林大僧正の夫人である柳雨氏であつた。そしてこの夫人には、亡くなられるまでわが子のように可愛がつて頂いた。寿仙院時代のお婆さんといい、沼津の夫人といい、よきみ仏たちが、私を育てて下さつた。

柳雨氏は、どうしてか右足膝が曲らなかつた。そして膝には永い包帯を幾重にも巻いておられた。坐る時は、右足をなげだすようにして坐り、何かその上に布をかけておられた。風呂などに入られる時は、この包帯をとられるのであるが、それを足にまきやすいように、まいて置くのが、私の仕事の一つであつた。

「上手にまけているね」

よくそう言って、ほめてもらったことを覚えている。

中学の五年間を沼津で過ごして、私は仏教専門学校に入學させてもらうこととなり、再び京都に行き、ここで三年間を過ごすこととなる。そして、京都生活は、専修道場で林大僧正の膝下で常隨給仕として、その薫陶を受けた。

林大僧正は寡黙な方で、余りやかましいことは言われなかった。しかし、眼先は炯々として、見るからに威厳があった。その当時、専修道場には、岸寛勇師、山田智旭師などが生活を共にして、勉學されていたが、皆林大僧正の前ではビリビリしておられた。その厳格さは、浄土宗では有名であった。

ある年の知恩院での加行けぎょうの講義の折、加行僧が居眠りをしたということで腹を立てられ、講義を中断されて下山されたことがあった。知恩院の執事長が、何度も専修道場にあらまりにこられたが、仲々に応ぜられなかった。

「指導者の指導が悪いから、居眠りをするような加行僧がでるのだ」

そう言って、執事長をひどく叱られたと聞いている。万事がこの通りであるから、私などもとてもこわかった。それでも余り叱られた記憶がない。ただ一度、何かの理由で夜遅く帰ってきたことがあった。林大僧正はまだ勉強しておられたが、そっと唐紙をあけて、「ただいま」と言ったところ、ギョロツとした眼でにらまれ、

「おそいではないか」

と一言だけ言われたが、未だにその顔のこわかったことを覚えている。

しかし、食事のお給仕などをしていると、時々冗談などもいわれ、又菓子などを頂いたりもした。林大僧正には、今まで弟子らしい人がいなかった。それだけに、弟子としての私に、何かと心をかけて頂いたようである。それは私にとって、この上なく有り難いことであると共

に、身に余る光栄でもあった。ただ残念なことには、まだ私は学生であり、恩師が専門とされていた高度な学問には、手がとどかず、そしてやがて戦争となり学徒出陣をするというような経過を辿ったため、林大僧正の学問的薫陶は、殆んど受けずして、終ってしまった。

専修道場に居られた頃、師は中国との仏教交流を重視され、日華仏教研究会を昭和十年に結成されて以来、幹事長として、辣腕をふるわれた。自から中国へも何回か行かれ、晩年（七十六歳）には浄土宗開教総監として、南京に赴任された程であった。昭和十八年のことである。

そうしたこともあって、私の関心は自然と中国に向いた。そして、将来、中国仏教を研究するように心掛けた。大僧正の影響であった。しかし、中国仏教を知るためには、先ず中国の思想を研究する必要があると思ひ、大正大学に進学（昭和十七年）する時は、支那哲学科を選ぶこととなった。今にして思えば、それはそれでよかったのであるが、恩師林大僧正の真意に反するものがあったのではないかと、心ひそかに申し訳けないとも思っている。

中国大陸での戦争は漸く苛烈となり、戦局も急を上げ

てきた。そして私の仏教専門学校も卒業が定められ、昭和十六年十二月に卒業し、私はその暮に知恩院で加行を受け、翌年、大正大学に入学した。林大僧正との生活は、ここで切れることになり、私は東京の小金井の幡随院にある白道寮にお世話になり、大正大学学生生活が始まることとなった。

私の親元は、時の推移と共に変化し、その頃は沼津の乗運寺が親元であった。従って、学校の休みの時は、沼津に帰って弟子生活を送った。

人生の生涯は、誰しも転々とすることが多い。しかし、私のように、親元が次々に変えることは珍しいことであらう。しかし、幸いなことに、その親元には、いつも私を守るみ仏達が多数いて、私の成長を助けて下さった。そしてその間、いろいろと薫陶を受けた。人間はこうした過程の中で、成長していくのである。

恩師林大僧正とは、大正大学に進学してからは、たまにしか会うことができなかった。そして、最後の対面が、アメリカの戦闘機が銃撃をしてくる中であつたとは、誠に悲しい思い出であつた。

(つづく)

ナムナム童話 (5)

ナムナムさんのはっぱ

ぬ・の・む・ら・て・つ・や

いちまいだけ 木にはっぱが のこっています。

ナムナムさんの はっぱです。

ナムナムさんの はっぱは すきとおった冬の空を見あげながら おもいだしているのです。

あれは まだ ナムナムさんが 土の中にいるときでした。

そうなんです。ナムナムさんは どこへでも行けるのです。なんにでも なるのです。まっくらな しめった土の中で セミの子どもが いいます。

「こんどは ぼくも おとなにならなければならぬのかな。いやだなあ。ずっと こうして ねていたいんだけれど。」

セミの子どもは ねむい目を こすります。ナムナムさんが やさしく いったのです。

「おとうさんと おかあさんが いっしょうけんめいに きみを生んでくれたんだよ。せかいじゅうのセミが いつまでも生きつづけるようにと。だから きみも りっぱなセミになって 大きな声で ミーンミーンと ないておくれよ。おとうさんや おかあさんが よろこぶよ。」

セミの子どもは 小さい声で ミンミンと なきながら いいます。

「ナムナムさん ありがとうございます。」

ナムナムさんが セミの子どものまわりをあたたかい土で つつんでくれました。

おもてでは 氷がはって 土の上には しまばしらが立ちます。でも 土の中は あたたかいので アリたちは げんきです。

なつのあいだに エッサエッサと たくさん のえさを 巣のなかに はこびこんであります。

それでも ときどきは えさがたりなくなるのです。そんなときには よそのアリの巣へいって たのみます。

「すまないけれど すこし食べものを わけてくれないか。」

「だめだめ。そんなことをしたら こっちの食べるものがなくなっちゃうよ。」

と ことわられてしまうのです。

「よし それなら おしかけていって ぶんどってこよう。」

たべものがないアリたちが そういって アリとアリの せんそうが はじまりそうです。

こんなときにも かならず ナムナムさんが りょうほうのアリたちに いってくれます。

「みんな おなじアリなんだ。たすけあわなければいけないよ。たべものを わけてもら

ったアリは そとがあたたくなったら は
たらいで かえしてあげよう。」

ナムナムさんのおかげで いつも せんそ
うにならずにすむのです。たべものも わけ
てもらえます。

アリたちは みんなで いいます。

「ナムナムさん ありがとう。」

こうして アリは さむい冬のあいだも
あんしんして すごすことができます。

春になって つくしのぼうやが目をさます
と、

「わあーい あたたかいお日さまだあ。」
と さげびます。

その声で 草も木も虫も 目をさまします。
「うれしいな きもちがいいぞ。」

土の中から みんなが顔を出して よろこ
ぶのです。

けれども 土の中で ブツブツいつている

ものがあります。

いったい だれでしょう。それは 木の根
っこや 草の根っこや だいこんや にんじ
んです。

「みんなは あたたかい お日さまにあたっ
て きもちがいいかもしれないけれど ぼく
たちは いつも まっくらな中で どんこ
になつていなければならぬんだ。いやにな
っちゃうよ。」

それをきいていた ナムナムさんが はな
してくれました。

「きみたちがいなかったら はっぱも 花も
実も かれてしまう。はっぱや 花や 実が
なかったら きみたちも なくなってしまう。
きみたちこそ いちばん だいじなんだよ。」
だまってきいていた根っこたちは ナムナ
ムさんのいうことが わかったのでしょう。
「ウン」 「ウン」 とうなずきながらいまし

た。

「ナムナムさん、ありがとう。」

根っこが がんばってくれたので はっぱも いっぱい しげりました。

「ミーン ミーン ミーン ミーン」

あつい夏のある日 どこかで きいたことのある声がします。

ナムナムさんには すぐに わかったのです。あのときの セミの子どもだということです。

「よかったね。」

と ナムナムさんというと セミも

「ナムナムさん、ありがとう。ミーン ミーン ミーン」

と 声を はりあげた そのとき――

「エイッ／＼」

「エーイッ」

するどく はやい声と よわよわしい の

んびりした声とがひびいて セミの上に ふたつの網が かぶさってきました。

でも のんびりした声と ゆっくりした網のおかげだったのでしょうか あぶないところで セミは にげることができました。

するどい声が おこって いいます。

「のろま。おまえのせいで せっかくの えものを にがしてしまったじゃないか。のろまの まぬけ。」

そんなことを 早口にいうと かけていて しまいました。

のこされた子は 網をもったまま じっと 木を見あげています。

そして いいました。

「はっぱは いいな。しっかりした根っこに ささえられているはっぱ。」

そのことばは 風にとばされて すぐに きえてしまいましたが ナムナムさんの耳に

は はつきりと のこりました。

「そうだ。ぼくも はっぱになるう。」

ナムナムさんは こうして はっぱになったのです。

秋になると はっぱは 赤や きいろや だいたい色に かわります。

「はっぱが いいな」といっていた子がきて ゆう日にてらされる木を見あげます。

「わあー 木がもえているみたいだ。ぼくのはっぱが ボーボーと 火のようにもえている。赤いはっぱが 空へまいあがっていく。

うれしいな。かるいなあ。こんなに ぼくは かるかったのかな。どこへでも とんでいける。だれとでも あそべる。うれしいな。ぼくは もえているはっぱなんだ。」

その子は まいにち ゆうがたになると木の下にきて 赤くもえている はっぱを見あげます。そのたびに 子どもは げんきにな

り じょうぶになっていくようでした。

赤いはっぱが ちりはじめて 日ごとに そのかずがおおくなっていきます。

はっぱのすくなくなった木は だんだんと さびしくなりましたが それを見あげている 子どものまわりは 赤いはっぱでいっぱいでした。

あたたかい はっぱで いっぱいでした。もえている はっぱで いっぱいになりました。

あんまり地面があたたかいので 土の中の アリや 根っこがいったのです。

「ナムナムさん ありがとう。」

それが きこえたのでしょうか。子どもも 大きな声で いいました。

「ナムナムさん ありがとう。自分のちからでもえている赤いはっぱ ありがとう。」

それから その子は二度ときませんでし

た。

こうして はっぱは いちまいになったのです。

いまにも えだからはなれそうなのはそのは

っぱが いいました。

「もうすぐ もとのところへ かえられる。」

その夜 えだをゆすって こがらしは ふきつづけました。

(おわり)

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の高さですが、額縁の高さでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八八二二八七

立ち止まるな善導

<18>

寺内大吉

挿絵・松 濤 達 文

英才の秘密

七

西遊から帰朝した玄奘三蔵は持ち帰った経典類を精力的に翻訳しはじめた。旧訳の誤まりを次々と改めながら「新訳を知らない者は僧たる資格なし」とまで極言した。これに反論して「貴僧だってその旧訳仏典によって僧

となった身ではないか。もう一度、俗人に戻ってやり直したらどうか」と皮肉った僧法仲の逸話はすでに紹介した。

この法仲は玄奘より十余歳も年上で、出家したのが四十を過ぎた中年期だったと伝えられている（道宣「続高僧伝」）。それも私度僧であつた。

私度僧とは官許を得ていない自称の沙弥で



ある。日本流でいう聖（ひじり）であろう。貞観の治における勅令で「みだりに私僧となつた者は極刑に処す」と厳禁されていたのである。これは徴税とか兵役を若者が逃避するのを防ぐ措置だつたと思われる。「たとえ殺されても自分は僧となる」と法仲は国禁を犯して出家剃髪した。

法仲の素姓は正しく茅山（ほうざん）の明法門下だった。明法は興皇寺法朗の弟子で、その兄弟子には三論の巨匠嘉祥大師吉祥がおり、さらには善導が幼時出家した山東半島密州の明勝法師も同門である。さらには玄奘が帰朝直後、弘福寺の訳経場へ十二人の「証義大徳」にえらばれた実際寺の明琰もこの法系に列らなるはずである。実際寺は現代で言う単一の伽藍ではなく、そこに官吏宿舍や学生の就学所が併設され、寺院もまた禅院、律院、華嚴院、三階院、浄土院などがあつた。明琰はおそらく吉祥直系の三論僧だったのであろう。

ところで法仲の玄奘批判はその名声を妬んだ諷言ではない。法仲は「楞伽經」の權威者で、中国禪宗の歴史においてこの經典を伝統化した最初の人とも言われる。講義ぶりは經文の句こそ引用はするけれど区々たる語義の解釈なぞ全く顧りみなかった。修行実践に即応した説き方で、後年における禅僧の風姿を漂わせていたという。

これは師の明法譲りで、彼も生涯茅山の奥谷から一步も離れない隠逸だった。あるいは善導の師明勝法師もそのタイプであつたかもしれない。善導自身が隠逸の道を歩んだ事実からも推察できる。ただし善導の場合は孤立した隠逸ではなく、浄土念仏という大衆教化だけを目的として「陋巷に隠れた」のであつた。いつの時代、どの国でも共通であるが、仏法は陽光に照射された上流社会と日蔭の大衆教化との両断面で花を開かせてきたのだつた。

さて実践派の禅哲法仲が、じかにあのよう

な諷刺を玄奘三蔵へ叩きつけたどうかは疑わしい。両者に交渉の痕跡はないからである。

おそらく玄奘傘下で訳経事業に携わった心なき学僧をいませめた逸話にちがいない。印度帰りの玄奘が、唐王朝にもはやされ、その傘下で肩怒らせて斯界を睥睨するエリートが許し難かったのであろう。經典の細微な訳業が大衆の悲しみや苦悩とどれだけかわるというのか。

そんな実践派隠逸たちの矢おもてに立たされたのが若きエリート僧、念昌寺の弁機であった。彼はその向学心からも全百巻に及ぶ大部な「瑜伽師地論」の訳業に手を染めたかったのであろうが、唐政府はそれを許さなかった。

「瑜伽師地論」はガンダーラにいた無着が、歴史上実在の弥勒（兜率天にいる弥勒菩薩とは同名異人）から教授された大乘哲理の根幹を説いたものだ。有と無、存在と非存在、という固定した観念から脱却し中道への悟入を

主唱する論理大系である。

それほど重要な経論だったが、唐政府にとっては不急不要の仕事である。一刻も早く知りたいのは西域や印度の実情であった。玄奘が歩いてきて見聞したレポートこそ緊急な重要事なのだ。旅行記の完成を尻を叩くようにして急がせた。

その尻を叩かれたのが若き弁機であった。彼は玄奘の旅メモを中心に文章をまとめる役割を振りあてられた。弁機自身がこの役を買って出たのか、玄奘が意識して避けたのか、これは後世へ「謎」となっている。それはともかく帰朝の翌年貞観二十年（六四六）七月十三日、「大唐西域記」は完成して皇帝太宗へ捧呈されている。

現在に伝わるこの世界的名著は「三蔵法師玄奘奉詔訳、大総持寺沙門弁機撰」となっているが、果たして当時の原文そのままだったかどうか、疑問点が多い。疑問点の一例としてマガダ国での玄奘と戒日王（シーラデティ

ヤ)との会見記をあげることが出来る。

マガダ国は印度の中央に位置する釈尊とはゆかり深い古代国である。現在のビハール地方にあたる。釈尊が悟りをひらいた成道の地ブダガヤ、「観無量寿經」の主役ビンバサーラ(頻婆娑羅)王が造った王舎城などの仏跡がある。釈尊滅後、阿育王やグプタ王朝の諸王によって仏教主体の統一国家が形成され、此処を軸点として全印度を支配してきたのである。

首都曲女城の北方にあるナーランダー僧院は大乘教団のメッカでもあった。五世紀初頭に在位した帝日王の創建にかかるもので、寺院というよりも学林の色彩が濃厚だったらしい。

とりわけ唯識学の伝統は、無着によって大乘仏教に目ざめた世親がその鼻祖となつて陳那―護法―戒賢とすぐれた論師を輩出させてきた。諸王もまた篤くこの学林を庇護し、つねに数千人の俊才高学が学んでいたという。

北印度の仏都カシュミールに一年ほど滞在した玄奘がこのナーランダー僧院へやってきたのは貞観八年前であつたか。世親直系の戒賢論師が未だ健在で「瑜伽師地論」などを講じていたのである。もっとも戒賢の生年は五二九年と伝えられ、貞観八年に在世となれば百五歳ということになる。

それはともかく玄奘はナーランダーに三年滞留。このあと南、西印度を歴遊し、再びマガダ国へ帰ってくる。貞観十五年あたりで戒日王と会見するのである。

戒日王朝にはすでに全印度を支配する昔日の王威は失われていたようである。現に玄奘が謁見を受けた直前にも戒日王暗殺の気配が色濃く立ちこめていたことを、「大唐西域記」は書いている。

さて会見の様式だが、戒日王は「大唐国とは豈に此れ是れなるや」と始皇帝の秦國を話題にして問うた。玄奘は答える。

——然り。至那とは前の王の国号にして、

大唐とは我が君の国称なり。昔、未だ位をつがざりしとき、これを秦王と言えるも今はすでに王統を継承して称して天子という。前代の運終りしときには、群生は君なく、兵戈乱れ起り、生靈を残害せり。秦王は天縱含弘にして心に慈愍をおこし、威風は鼓舞し群凶は殄滅せられ、八方は静謐となり万国は朝貢す。四生を愛育し、三宝を敬崇し、賦斂を薄くし形罰を省せり。而も国費の用は余りあり氓俗に悪者なく、風猷大いに化せることは以てつぶさには挙げ難し。

戒日王は大きくうなずいて「盛んなるかな。彼の土の群生は福として聖主を感恩するならん」と答えたという。

外交辞令のやり取りならば理解できるが、旅行記としては如何にも不自然であろう。

八

玄奘が西遊へ出発したのは貞観元年（六二七）である。三年説もあるが、いずれにせよ玄奘の立出時の唐政権がこれほど安定、盛威を誇ってはいなかった。玄武門のクーデターで兄建成や弟元吉を殺した直後である。服属させたのが貞観四年であり、西方強国たる青海の吐谷渾やチベット吐蕃と妥協したのは十年以後のことである。立出を貞観元年とする論拠にも西突厥の統葉護可汗と玄奘は会見しているが、三年説ではこの可汗が故人になっており会見は不可能だからである。

「八方は静謐となり万国は朝貢す」とも語る。その朝貢で、隋時代には小野妹子らを送りこんでいた日本国も相手が唐政権にかわって中止している。復活して最初の遣唐船で大神御田麩らを送りこんだのが貞観五年である。江南の揚子江周辺の反乱も鎮定にはほど

遠かった。いわば新政権誕生の内憂外患が満ちていた時期だった。

出立以来、玄奘は一度も祖国の土を踏んでいない。いわんや彼が歩いたルートには中国人の影は殆んど見あたらない。「貞観の治」が熟成して大唐帝国が確立してゆく姿は知るよしもないはずである。それが掌心を指すが如く現状を指摘するのは不可解である。帰国後の造作か、あるいはいったん完成した「大唐西域記」を何らかの圧力によって補筆した以外には考えられない。

筆者はその後者を取るであろう。何らかの圧力が加わったにちがいない。しかもその圧力をもろに浴びたのが筆者の弁機であった。「私の叔父にあたる男で王玄策という武人がおります」

貞観二十二年が明けて幾ばくもない寒夜、若い吏生の王徐明が実際寺の浄土院へ善導を訪ねてきた。静かに語りだした。
「その人が？」

「つい先日のことですが、天竺から戻ってまいりました」

「天竺から……」

玄奘三蔵が帰国してきっかり三年が過ぎている。そのあとを追うようにして王玄策は帰ってきたのである。甥の徐明が語る内容はなかなか複雑だった。

王玄策の印度への出発は「玄奘帰国の直前」とあるから貞観十八年の秋ごろだったのであろう。単純な旅の出発ではなかった。

これまで印度の四人の国王はそれぞれ唐へ朝貢していたが、中印度のマガダ王国だけが近年「音沙汰なし」であった。様子がおかしい。太宗は正使に朝散大夫の李義表を、副使に右率府の長史王玄策を選んで、二十二名の従者をつけて使節として派遣した。

マガダ国の首都曲女城へ到着したが、すでにそこに戒日王の姿はなかった。ただし王玄策らがそれを知ったのは獄へ投ぜられてからである。

戒日王は反乱者那伏帝（アラナーシュ）によって謀殺されていた。この瞬間に栄光のグプタ王朝は終止符を打たれたことになる。「大唐西域記」が報じた戒日王暗殺の陰謀が現実化したわけである。

脱獄を考えた王玄策らはある夜それを実行する。正使の李義表らは殺されるが彼は無事に城外へ逃がれ出た。そこから一路北走しチベットへはいった。往路に歓待を受けた文成公主がいる吐蕃国へたどり着いた。

文成公主は唐太宗の皇女である。貞観十五年吐蕃国王の要請をいれてこの蕃地へ嫁した。吐蕃国と唐との関係融和に果たした彼女の功績は大きい。また求法の唐人僧をつねに手篤く庇護した。

吐蕃王は精兵千二百人を王玄策に提供した。さらにヒマラヤ山麓の大国泥波羅（現在のネパール）国の軍七千余騎もこれに加わった。王玄策はこれらの軍勢をひきいてマガダ国へ攻めこんだ。曲女城を囲こんだ三日間の

戦闘でこれを占領し、反乱の那伏帝を捕虜として長安へ凱旋してきたのだった。

「沙門玄奘は果たして戒日王に会ったのだろうか、と叔父は疑ぐるのです。あの記述の通りだと王はすでに生きてはいないはずだ、とも申しております」

王徐明は憂わしげな眼で善導を見つめてくる。「大唐西域記」の事実性を裏付ける決定的な証人が現れたのである。

「あの沙門は道心堅固な人のはずです。嘘は言いませんまい」

と答えるしかない。

「事実とかけ離れた記述が多すぎるそうです。例えばナーランダー僧院の戒賢論師ですが、この人も実在していたのかどうか。すくなくとも別の沙門によると、いま瑜伽師地論をナーランダーで講じているのは宝師子大徳のはずだと言っているそうです」

「その別の沙門とは？」

「玄照法師という人です」

「そういう沙門がナーランダー僧院にいたのですか」

「いたそうです。いや、現在も滞留しているとのことす」

玄照法師は太州仙掌の人。現在の陝西省華陰県である。父祖はいずれも政府の高官だった。しかし成人式を迎える以前に髪を剃って出家してしまった。長安へ上京してきて仏典を取り組んでいたが、やがて志を立てて貞観年中に大興聖寺へはいり、玄証法師について梵語を学んだ。

この大興聖寺の創建は貞観三年だから、そこで何年間学習したかは不明にしても伝記を逆算すると貞観十六年ごろ、西域へ向けて旅立った。

——錫を杖き、西にすすんで想いを祇園に掛け、金府に背いて流沙を出て、鉄門を踐みて雪嶺に登る。香池にそそぎては結念して四弘を契り、葱阜にわたっては翹心して三有を

度せんことを誓う。途は連利を経て觀貨羅を過ぎ、遠く胡疆に跨って吐蕃国に至る。

（義浄著「大唐西域求法高僧伝」）

觀貨羅国は大月氏に属する大夏国である。

チベット吐蕃国では唐王朝から嫁入った文成公主の歓待を受けた。彼女の興入れが貞観十五年だから玄照の出発時を推定したのである。さらに旅を続けマガダ国へ入城、ナーランダー僧院へ籠もった。

そこに住すること三年余、勝光法師について中論や百論を学んだ。さらに「瑜伽師地論」は教えを宝師子大徳に受けた。

玄奘が学んだという戒賢論師が百歳を遙かに越える不自然さと比べて、玄照の師たちには現実性がある。勝光や宝師子はこの「求法高僧伝」の著者義浄が訪れた折もナーランダー僧院で存命しているのである。戒賢論師は有名人にちがいないが、それだけに「造作」の匂いも濃厚である。

これは「大唐西域記」にはないが、さらにこのあと慧立や彦惊らによって撰述された「大慈恩寺三藏法師伝」によると、戒日王に面謁した帰路のナーランダー僧院において玄奘が講者のシンハラシュミ（獅子光）と論戦して完膚ないまでに論破したという記事がある。名前から推してこの獅子光は宝獅子大徳と同一人物であろう。

論戦に負けた学僧獅子光は恥じ入ってナーランダー僧院から姿を消したとあるが、玄照法師や義浄の記事では立派にその教壇に立っていた事実を明らかにしている。これも「造作」であろう。

案外、生き証人の玄照法師が現れて、それを打ち消す意図がふくまれていたのかもしれない。「大慈恩寺三藏法師伝」は垂拱四年（六八八）の撰述で「大唐西域記」より四十二年も後に完成したものである。

玄照法師を生き証人と書いたが、彼は長安の都へ帰還しているのである。つまり貞観二

十二年に捕虜の那伏帝を連れて帰国凱旋した王玄策は、朝散大夫に榮進したあと太宗に請うて玄照法師を長安へ連れて帰ることを献策する。

——表奏してその実徳を言うにより遂に勅をくだし重ねて西天を指し、玄照を追うて京に入らしむ。

（「大唐西域求法高僧伝」）

王玄策の表奏に玄奘の過剰な名声や人氣への怒りがなかったであろうか。玄奘その人へというよりもその浮薄な異常人氣、さらにはそれに便乗しようとする輩への怒りだったはずである。彼らに比べて遠く異郷の地にいる玄照法師は余りにも真摯、余りにも恵まれなかったからである。

玄照法師の帰国がいつであったかは明確でない。ただ翌貞観二十三年五月二十六日、皇帝太宗は翠微宮で五十二歳の生涯を閉じる。

おそらく帰国はそのあと高宗の治世になって以後であろう。

長安へ帰国した玄照を迎えたのは、持ち帰った梵本の訳業ではなかった。高宗は彼の西域譚にある薬草にいたく興味を示し、それを採取にいつてくれぬかと持ちかける。「求法高僧伝」は書く。

——既に洛陽の諸徳と相見て、略仏法の綱紀を論ず。敬愛寺の導律師、観法師ら、薩婆多部律撰を訳せんことを請う。既にして勅あり促して去（ゆ）かしめ本懐を遂げず。もたらずところの梵本は悉く京下に留む。是において重ねて流沙を渉りまた磧石を経たり。

洛陽敬愛寺の導律師や観法師が玄照が持ち帰った律部經典の翻訳を願ひ出たが、これも容れられなかった。梵本を京下におさめて玄照は本懐を得ぬ失意のまま、再び西域へ向う流沙の旅へのぼったのである。

カラコルムの山中を歩いているとき、ゆくから登ってくる中国人と出会った。何と王玄策ではないか。同伴しているのは波羅門の麻薬師だった。ロカヤータと呼ばれる印度唯物派の僧で快樂主義者である。各種の薬草を調合して夢心地にさせる術を心得ている。皇帝高宗が求めているのは、その薬草と調合師であった。

いま王玄策はナーバダ河の東河で、このふたつながらを得て長安へ持ち帰ろうとするのである。

「法師も良い薬を沢山、探がしておいでなさい」

王玄策はそんな言葉を残してカラコルム山嶺を東方へ去った。最後に振りむいた武人の両眼には同情の涙が光っていた。

それでも玄照法師は薬草を求めて山野を、流沙を歩きまわる。「求法高僧伝」は、

——南天を転歴し諸雑薬を将らして東夏に

帰るを望む。金剛座に到り、ひるがえってナ
ーランダー僧院にゆき浄とともに相見えて平
生の志願を尽くし、ともに竜花に会せんこと
を契る。

浄とは著者の浄業のことだ。

中国への道をたどろうとするが、すでにネ
パールから吐蕃国への道は閉ざされていた。
文成公主が死んで、中国とチベットの仲は途
端に戦闘状態へ突入してしまったためであ
る。

——遂にしばらく志を鷲峰（霊鷲山）に棲う
て情を竹苑（竹林精舎）に沈む。毎に伝灯の望
ありと雖も而も落葉の心にならず、ああ苦
行標識の利生も遂げず、攀雲の駕を思うて翼
を中天に墜す。中印度の菴摩羅跋国に在り、
症に遭うて卒す。春秋六十余。

玄奘三蔵と時間・空間を共通し、同じよう

な行動に生涯を献げながら、余りにも隔絶し
た人生が厳然と実在したのだった。

九

玄照法師の死はずっと後年のことだ。いま
善導の前にいる王徐明はきっぱりと言いきつ
た。

「罪はすべて撰述者にあるはずです」

「撰述者と言うと、あの弁機」

「大総持寺の弁機にすべてをかぶってもらわ
ねばなるまい」

「すべてをかぶるのだと？」

さすがの善導も語気がきつくなっている。

いったい誰が真の罪人だと言うのだらうか。

「沙門玄奘では影響するところが巨大すぎま
す。すべてを弁機法師の筆禍とすれば丸くお
さまるのではないでしょうか」

生き証人が現れて、朝散大夫の王玄策が上
奏までやってのけた以上「大唐西域記」に何

らかの結末を付けなければならなくなったのか。

「それで……」

「和上、お願いがございます。和上は弁機法師とお知り合いであるとか。彼を説いて筆の誤まりを訂正させれば、ことは音便に済むと思います。政庁側でも形式的な詫び状があれば、と申しております」

「わたしが口説きにゆくのか」

「それをお願い申上げたいのです」

すでに王徐明は老練な政治家になりつつあったようである。

「わたしには出来ない」

「出来ませぬか。書信でもどうでしょう

か」

「書信か」

「玄奘和尚の名声は傷つけたくはございません。一筆書いて頂いて」

「よろしい。それぐらいなら出来る」

やむを得ず善導は承引した。

王徐明が帰ったあと、灯芯を掻き立てつつ長い手紙を書いた。かんじんの「大唐西域記」を読んでいるので細部に触れることは出来なかったが、仏法大義のために私心を滅却すべきであることをくり返し書きつらねた。たしかに今の場合、問題の理非曲直とは無関係で、玄奘三蔵は「大義」である。弁機は「私心」ということになってしまふ。

夜が明けるとともに善導はそれを弟子の懷感に持たせてやった。

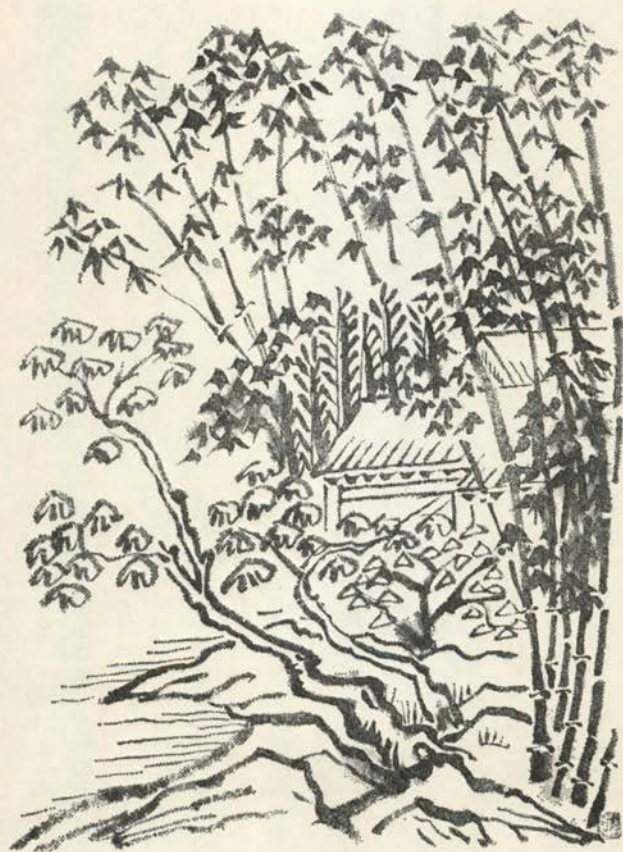
懷感はその竹林奥の庵居で、だいぶ待たされたらしい。弁機はその場で返信をしたため、懷感に持たせて寄越したのである。

返信は冒頭から「瑜伽師地論」のことで埋まっていた。弁機はいまこの百巻に及ぶ大部な梵文を翻訳すべく寧日なき有様のようである。時間ばかりでなく、頭脳が余す一点もなくこの論証のとりこになっているのだ。

訳経の進行状況から内容の一端に触れたあと、返信らしき文章はわずか一行で片づけら

☆☆

庵
居



れていた。

——お申越しの条、自他共に無用のことに
思われます。

善導の好意を冷めたく突き放してきたので
ある。

「自他共に無用のことか」

微笑笑を結ばないわけにはいかなかった。
若い英才の気おい立った眼が現前してくるよ
うである。

その晩、再び訪れた王徐明に弁機の返信を
そのまま見せた。

「智慧のない人だ。やはり本心からおごりた
かぶっているのでしょう」

あわれむような言葉を洩らすと、その返信
をもらい受け、多くを語らずに帰っていつて
しまった。

僧は王を敬せず——何の脈絡もなく善導に
はそんな言葉が胸先へ浮上してきた。江南廬

山の念仏者、慧遠の遺訓であった。

「王を敬せず」ということは同時に「王と闘
わず」という意味もふくんでいるはずであ
る。無知盲昧な大衆にとって、王権とは無縁
な存在なのである。敬う必要もなければ、さ
りとして闘うのも愚かな話である。そんなこと
よりも大衆には為すべき問題が山積している
であらう。

善導はその全貌をやがて知ることになるの
であるが、若き英才弁機に仕掛けられた罠が、
ほどなくじわじわと彼を締めつけてゆくのだ
った。

その第一弾が、しがない盗人の盗品吟味か
ら発端した。その盗人は、高価な金銀をちり
ばめた小枕を隠し持っていたという。女人
が閨房で用いる宝枕であった。盗人は、それ
をある沙門の草庵から盗みとった、と自白し
た。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十年十一月二十五日 印刷

昭和六十年十二月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八―八二―八七番

現代仏教情報大事典

現代仏教情報研究会編

仏教界の「現在」が見えてくる情報源!!

〔内容〕①寺院に関する情報 ↓ 各宗派の本山、有名寺院、海外の開教寺院・名所仏蹟など ②組織に…… ↓ 各宗務庁、都道府県仏教会、学会、宗立学校、仏教青年会、宗教法人事務主管部局、世界仏教徒連盟など ③行事・儀式に…… ↓ 主な本山・有名寺院の行事、冠婚葬祭、④仏教常識に…… ↓ 知っておきたい仏教知識・仏教用語など ⑤寺院経営に…… ↓ 税務対策、多角化、法律問題など ⑥布教に…… ↓ 放送、テレホン相談など ⑦仏教関係業界に…… ↓ マスコミ、葬儀、墓地・霊園、仏具、石材、門前町、精進料理、⑧人物に…… ↓ 現代人物名鑑（僧侶・学者・文化人等約300人）、物故者



【定価二二、〇〇〇円】特別定価一九、〇〇〇円

(昭和61年3月末迄)

絶賛発売中!!

大日本仏教全書

仏書刊行会編 全一六一巻
(※浄土部Ⅱ巻53・Ⅲ巻63)
ご希望の巻を分売致します
分売一冊単価二一、〇〇〇円

織田得能著 仏教大辞典

定評ある内容の正確さと、
語彙の豊富さ。豪華机上版。
B5判・定価一六、〇〇〇円

仏像仏典解説事典

三井晶史編 (昭和新薬国訳
大蔵経解説部一・二巻合本)
代表的な仏像一八八点・仏
典五三六点を収録。索引付。
四六判・定価二一、〇〇〇円

梵字大鑑

種智院大学密教学会編
わが国唯一の梵字一大集成
B5判・定価二五、〇〇〇円

- 内容見本無料贈呈・電話またはハガキ(JD係)でお申し込み下さい
- ご注文・お問合わせも直接当会へ
- 全国無料配達・代金後払い

☎03(724)8031

基本的名著の
再評価と普及
名著普及会
〒152 東京都目黒区平町1-16-6